

1

調査の解説

なるべくしてなった当然の結果



(社)全国学校図書館協議会学校図書館活動推進委員
元ベネッセ教育研究開発センター顧問

藤森喜子

調査の解説

なるべくしてなった当然の結果

(社) 全国学校図書館協議会学校図書館活動推進委員
元ベネッセ教育研究開発センター顧問 藤森喜子

1 調査の背景

平成10年(1998)に告示された現行の学習指導要領は、「生きる力」という言葉に象徴されるように、基礎学力の知識の蓄積面だけでなく、その基礎・基本を活用していく「知」の運用(応用する力)面に重点が置かれた。

国語科においては、「集約・統合・重点化」の観点から、小学校において2学年ずつまとめて指導内容を示すこととし、中学校においても1年と2・3年の2つに指導内容がまとめられた。そして、児童生徒の学習負担をなくし、学び方にゆとりが持てるよう「移行」「精選・削除」の観点から、音読の精選、朗読の削除(小学校)、読解に深入りしない、文法・古典は必要な範囲内、文学史の削除(中学校)、漢字の「書き」は上学年で(小・中学校)などの措置がとられた。「新設」の観点は、話し合う活動例が示され、コミュニケーション力を高める、情報活用能力などの言語運用能力の育成に重点が置かれた。このような改訂にはそれなりの国語教育施策のプロセスがある。言語事項の「漢字」に限ってその歴史的変遷をたどることは、その後の国語政策のあり方にも関わるので、一言触れておくことにする。

昭和24年(1949)「国語問題要領」として国語審議会が出した文書の解説で『日本のことばは明治以来少しずつではあるが、やさしくわかりやすい表現のほうに変わってきた。(中略)知識が少数の人間だけの持ちものでなくなり、文字を読んで理解する権利が誰にでもあるようになっていく以上、これは当然

のことである。』と示され、表音式仮名遣いや漢字制限に発展していった。また、戦後のGHQ(連合軍総司令部)の民主化政策と相まって「現代かなづかい」と「当用漢字表」が告示されることになった。

昭和22年(1947)学習指導要領が教師の「手引き」として示され、昭和33年(1958)に国家基準として法的拘束力を持つようになる。その昭和33年の学習指導要領では、『当用漢字別表(881字)全部が書け、使いこなすこと』とある。その後、人名漢字の問題等が論議され、昭和41年(1966)当用漢字表の見直しが諮問されることになる。紆余曲折の末、昭和54年(1979)に中間報告、2年後の56年(1981)に「常用漢字表」が告示された(小学校で1006字、中学校939字の計1945字)。それ以降、平成元年(1989)の学習指導要領まで、漢字教育は『各学年の常用漢字に使い慣れ、文章の中で適切に使うようにすること』と示されてきた。

このように変遷してきた漢字であるが、現行の学習指導要領の漢字学習の示され方『○程度の漢字を漸次書くようにする、読みはその学年で、書きは2年間で』では、上の学年に移行されたものが果たして次の学年で習得されたかどうかの確認がなされにくいのが実態である。文部科学省の学力テスト(教育課程実施状況に関する調査)をはじめ、民間教育研究所関係の調査結果(例えば、(財)総合初等教育研究所の「教育漢字の読み・書きの習得に関する調査と研究」、2005など)においても、記述問題のみならず漢字の「書き」ができない子どもの増加が指摘されてい

る。

一方で、平成17年1月調査の文化庁「国語に関する世論調査」では、常用漢字数は「特に不都合はないので今のままでよい」が75.7%、「漢字の数をもっと減らした方がよい」が9.1%という国民の認識の実態が示された。さらに、昨今の「気になる言葉づかい」（『日経プラス1』、2005.10.1号）や方言ブームの暗号化した奇妙な表現（『産経新聞』朝刊、2005.9.18）が問題視されつつあり（もちろん感性として評価する人も一部いるが）、日本の社会全体の言語環境について大きな問題になってきている。

2005年10月に発表された内閣府の調査「学校制度に関する保護者アンケート」で、学力低下の現状を憂いて約7割の保護者が公立学校よりも塾の方が優れていると考えていること、ゆとり教育を見直すべきだが6割以上、学校教育内容が易しすぎるが6割を超えていたのも、今、「学力」に関して不安を感じている国民が多いことを示す注目すべき実態といえよう。

言語はものを考え、人と人とのコミュニケーションにも、創作活動にも、発明・発見にも全ての活動の根幹となるものであるから、言語活動の乱れは、社会に及ぼす影響が非常に大きい。これからの日本を考えると、最優先されるべき国策として喫緊の課題ではないかと思われる。

2 学校における課題

全国的に今日の学校の実態は、その自治体の教育施策でかなりの格差が見られる。

1999年後半から学力低下論が始まって世論が騒がしくなり始めた。国も教育課程審議会の新しい評価のあり方の推進や、教育改革国民会議報告、学力向上フロンティア事業、学びのすすめなど速い対応が示され、2002年には全国学力テスト（教育課程実施状況に関する調査）の実施も始まった。

その後、OECDのPISA、IEAのTIMSSの結果等でも学力の低下が明白になるにつれ、ついに「今後の初等中等教育改革の推進方策について」という諮問が2003年5月15日に中央教育審議会に出された。そして、2005年10月26日に「新しい時代の義務教育を創造する」と題する答申が提出されたところである。

今まで学習指導要領の標準を几帳面に守ってきた学校現場も、学習指導要領ミニマム論以来、各市町村、各学校単位で教育課程を主体的に工夫していく実践が増えている。総授業時数を増やしたり、朝学習、放課後の補習、自主学習、小テスト、漢字検定、英語検定のすすめなどだけでなく、少人数指導による人的配置なども地方自治体予算からボランティアと内容は様々であるが、実に多様な研究実践が行われている。とくに文部科学省や自治体の研究指定校などにおいては、その研究実践結果が検証され研究成果が上がっていることがうかがえる。平成17年度の研究校の中で、読書活動と国語力との関わりをすべての教科学習の中で検証した学校があったが、読書活動が語彙力を高めていくことのプロセス、それが表現活動にも反映していくことが実に見事であった（目黒区立第八中学校研究推進委員会の「中学生の語彙調査」、2004）。また、この研究校以外にも、読書活動によって、学年配当漢字以外の字が読めたり書けたりするようになったなどの報告もある。実際、中学生のみならず小学生でも、漢字一字とひらがなの混ぜ書きの言葉は意味が理解しにくく、むしろ漢字をしっかりと書いてルビをふった方がわかりやすいという児童生徒の声が学校現場で多く聞かれる。とくに小学校での学習や中学一年生の「漢字の成り立ち」の学習では、象形文字から発展していった漢字の面白さに目を輝かして学ぶ学習場面を見ることが出来る。ただ、授業時間の少なさで、言語事項にばかり時間をかけてはられないという事実がある。

今回の調査で、全学年を通して正答率0%の漢字は、「漸次」「推薦」「弔辞」であったが、漸次については、生徒の日常生活には登場しない言葉である。同様に「弔辞」も、子どもの生活からはほとんど無関係の語かもしれない。しかし、「推薦」については、学校生活の中にもよく登場する言葉なので意外であった。

もっとも今回のテストの全体の出来具合からすれば、納得できないわけでもない。テストの実施時期が1学期ということもあるが、全学年を通しての平均点が27.8点(n=2335)となったのは、厳しい言い方をすれば、なるべくしてなった結果といえる。つまり、これまでの国語施策の結果、及びこのテストの質問紙とのリンクで明らかになったように、漢字の習得は子どもたちの生活の変化と密接に関係している。「字が書けない」現象は、電子メディアの発達とともに、大人社会においても生じている現象であるから、むべなるかなといえなくもない。

今回のテストで、学校教育の課題が地域や家庭とも深く関わっていることが明らかになった。現在進行中の教育改革の施策の具現化で、学校の対応も今後ますます変化していくであろうが、当面、自治体や各学校単位での自衛のための工夫はいろいろなされていくことが考えられる。

とくに学校選択制が採用されている市区町村では、特色ある教育活動をアピールする中で、学力の向上を掲げている学校が多い。そして、そのような学校が選ばれている事実もある。しかし、自治体だけでなく校長の権限についてもその裁量度が増した分だけ、財政の豊かさや学校経営者の意欲で大差が生じる。

私立学校とは授業時数においても著しく少ない公立学校において、これからの教育体制をどう整えていくことができるのか、少子化の波の中、未来の日本を背負う子どもの教育

はどうあるべきだろうか。

3 解決策

① 国として

文化審議会に示された「国語力」の重要性が学習指導要領の中でどのように具現化されていくかが問題である。時間数を1時間増やす程度ではなく、国語教育の理念を明確にし、諸外国における自国語教育のように指導内容を体系的に整理してほしいというのが学校現場の気持ちだと思う。言語活動としての「話す」「聞く」「読む」「書く」の展開の仕方や、言語文化の継承も含めてかなり難しい課題ではある。

② 学校として

・教材の工夫

学習指導要領に基づいて作られた国語の教科書は現在、ページ数、内容ともに非常に薄く、資料編や発展教材の工夫はなされてはいるものの、出版社によってかなりの差がある。教科書だけでなく、副教材の活用や自主教材の作成など、実際にはすでにかなり行われているが、より一層の工夫が必要となっている。

・授業展開の工夫

文字そのものに意味をこめているという世界に誇れる漢字の学習は、単に文字を読み、書くということだけでなく、言葉そのものの獲得になっていることに気づいていない子どもが多いのではないだろうか。教師自身もそこまで意識して教えていけば、もっと漢字の勉強は楽しいはずだし、語彙数も増していくはずである。朝の漢字テストも悪くはないが、機械的なドリルの繰り返しよりも、納得しながら定着を図る学習の展開の方がはるかに効果的である。

・言語環境の整備は学校全体で

言葉の学習は国語科だけで行うものではない。他教科の授業とも連携しあい、よりよい言語活動が成立していく学校全体の環

境づくりが大切である。例えば誤字だらけの学級新聞やその他の印刷物などで、間違いのまま済まされている場合が意外に多いのである。教師の板書に至っては、とくに心したいものである。また、校外へ発信される通知文などについては、その学校の信用に関わることであるから十分に注意したいものである。

・読書習慣の定着

本を読むという行為は、目で文字面を追いつつながら頭の中でイメージしたり、整理したり、考えたりする高度な学習活動である。そこで目に映った文字は、結構インプットされているものだという。なるべく多くの書を読むということは、それだけ漢字の知識も豊かになるということである。今回の教育改革でも読書の重要性が強調されている。

③ 家庭として

・学力も感性も基本は家庭が発端

最近、脳科学の研究が盛んで、幼児教育と脳科学関係の書物がよく売れているそうである。確かに胎児のうちから母親の影響を受けて育つわけであるから、親の責任は大きい。今回のテストで質問紙とのリンクやまた、2004年に目黒区立第八中学校研究推進委員会が実施した「中学生の語彙調査」や筆者自身の実践研究の結果からも、家庭と学力との関係は深いことが見えてくる。

例えば、幼児期、親に絵本の読み聞かせをしてもらっていた子どもは、引き続き本に親しむ習慣が身についているとか、親が子どもとの会話（コミュニケーション）を大切にしていると、落ち着いた態度や他人への気配りができるようになるなどの結果が表れている。

テレビの視聴も意識的に取捨選択したり、計画的な利用の仕方ができるかどうかも親の生活スタイルがお手本になっている。「親の背中を見て子は育つ」わけである。

また、朝の10分読書で生徒が落ち着いて学習する姿勢が出来てきたという学校の実践をヒントに、家で親子読書を始めたら、親子の会話が復活したという報告事例をかなり受けている。学力も感性も家庭における家族の人間関係が大切で、まず、そこに原点があると考えられる。

・心の通うコミュニケーションを

最近、中学校よりも小学校で校内暴力が増えていることが文部科学省の調査（「生徒指導上の諸問題の現状について」、2005）で明らかにされている。原因の一つに、会話がなっていない状況があげられている。また、キレる子どもは、話し言葉も書き言葉も不得手なようである。つまり、表現できない、したくても出来なかった状況がそういう結果を招いてしまったことにある。

・メディアリテラシー

テレビの視聴やパソコンの使用について、目的的な生活習慣を家庭内で確立しておきたいものである。情報の一方通行は子どもの主体的な行動をとりにくくする。日本語が乱れる原因にもなる娯楽テレビ番組の現状をもっと真剣に考えてみるべきではないだろうか。品性のない笑いではなくて、いつまでも微笑が浮かんでいるようなウィットが日本人に少ないのも、日常生活に起因することが多いだろうし、現在の社会情勢の姿であるとも考えられる。

④ 地域として

・学校図書館と公共図書館の連携、学校図書館の休日地域開放

「読書の日」や「文字・活字文化の日」などに地域でイベントを企画してはどうか。例えば、産官学の連携によるプレー、ボランティアやPTA活動の力を利用する方法などがある。また、地域開放については三鷹市立第六中学校の事例などがある。

子育ては、学校・家庭・地域のそれぞれで行うべき役割がある。「ここまでが自分の領分」という狭い感覚ではなくて、お互いに連携しあうことで、子育て以外の効果も期待できると考えられる。

4 今後の課題

中央教育審議会の答申もなされて、これから新しい教育改革の具現化が推進されていくわけであるが、「確かな学力」と示された文言一つでも、例示されたその展開の仕方には十分に論議を尽くし、小学校から高校まで体系的な教育理論と教育内容の確立が望まれる。「学習意欲」の必要性が強調されているが、意欲欠如の原因が学校力や教師力にのみ責任転嫁されることのないように、施策本体の見直し・充実こそが基本であることを確認したい。これまでの歴史的検証の結果からも、かけ声よりも「場の設定」がポイントになっていたのだから。